

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第856号 平成26年12月25日

## ナナちゃんが教えてくれたこと

第64回全国小・中学校作文コンクールで最優秀の文部科学大臣賞を受賞した青山学院初等部5年の上杉魁人君の作文は、人が成長する瞬間を良く描写していて、秀逸だと感じました。

上杉君の作文は、11月29日付読売新聞にその要約が掲載されています。要約とはいえ、原文の少年の思いは良く伝わって来ます。

作文のあらすじは、以下の通りです。

少年の祖母は、家族からはナナちゃんと呼ばれています。そのナナちゃんは伯母さんの家にいたのですが、認知症を患い、しかも、歩く事が出来ず車椅子生活です。

ある日突然、ナナちゃんが上杉君の家に引っ越してくる事になります。

そもそも、上杉君の一家はマンションで生活しており、3人兄弟の末っ子である少年には自分の部屋というものがありません。そんな所に住人が一人増えるのですから大変です。皆で一緒の食事はおろか家族だんらんの時間も無くなってしまいます。上杉君は、ボロボロこぼしながら汚く食べるナナちゃんを見ると食欲も失せてしまいます。ある日、彼は母親に「なんで僕の運動靴を洗ってくれないの!」と母を責めてしまいます。母親が毎日の介護に疲れ、クタクタなのを知っていたはずなのに…。

その日の夜、上杉君がお風呂に入っていると、いつものようにナナちゃんが「ヨイショ、ヨイショ」と車椅子で廊下を進んで行く音がします。トイレに行こうとしているのです。しかし、その事を電話に出ている母親は気付いていないようです。彼は慌てて風呂から出て、バスタオルを腰に巻くと、「ナナちゃん大丈夫?」と喋って車椅子を押して上げるのですが、「ごめんね。ごめんね。」と何度も謝るナナちゃんの声聞きながら、「ナナちゃんは、ちっとも悪くないのに」と感じます。

トイレに行くナナちゃんを手助けしながら、普段、母親や兄は簡単そうにやっているが、それが如何に重労働だったかを上杉君は体感する事になります。

電話が終わった母親が気付いて「あらあら、魁ちゃんお風呂の途中で出てきてくれたの? ありがとう。気付かなくてごめんね。あとはやるから。」と喋ってくれたのですが、上杉君は「大丈夫。僕がやるから。」と答え、ナナちゃんがトイレから出て来るのを待ちます。10分程すると、ナナちゃんが「ヨイショ、ヨイショ。魁くんありがとね。すみませんね。ごめんね。」といいながらトイレから出て来ます。

上杉君は、ナナちゃんの手助けをしながら何だか悲しいような寂しいような胸

がチクチクするような感じに襲われます。誰も悪くないのに、皆が皆を思い合っているのに、それなのにみんなが大変でみんなが悲しい思いをしている、彼はそう感じます。上杉君は、風呂場に戻って自分の運動靴を洗い始めます。そしてこう思うのです。「そうだ、僕がお母さんに不満だったことはみんな自分の都合ばかりだった。靴ぐらい自分で洗うべきだった。自分の洗たく物ぐらい自分でたたくてしまえばいいんだ。自分のことを自分でやればお母さんの仕事が減るし、そもそもそんなことは当たり前のことだったんだ。それなのに僕は、立つことすら大変な病気のナナちゃんを責め、介護をがんばっている母にあたっていたのだ。」

以来上杉君は、ニュース等で他人事のように聞いていた「高齢化社会」とか「介護問題」を身近な問題として受け止める事が出来るようになり、「僕たちが大人になった時、真っ先に解決していかなければいけない問題だ」と思うようになります。そして彼は、「僕にもできることは、自分のことは自分でする、お手伝いをする、それから自分の祖父母はもちろん、ご高齢の方を見かけたら、ゆったりと優しい気持ちで接すること」だと気付きます。

この気付きは、少年の心の変容であり、新しい自分への脱皮といっても良いとおもいます。

何故、上杉君の心は変容したのでしょうか。

上杉君にとっては、ふとしたきっかけに過ぎなかったとはいえ、ナナちゃんのトイレを手助けする事で、普段、母親が当たり前のようにしてやっている介護の大変さに気付かされる事になります。彼はナナちゃんの車椅子を支えながら「何だか悲しいような寂しいような胸がチクチクするような感じがした」と表現していますが、その痛みは、ナナちゃんの病気や、大変な思いをしながらも優しさを忘れずナナちゃんを介護している家族の事を理解しようとして来なかった、自己中心的な自分に気付いた証であり、その気付きこそ、少年の心が変わった瞬間だといえるでしょう。

上杉君はナナちゃんから沢山のものを学んだと述べています。彼は、ナナちゃんに関わる中で、高齢化問題や介護問題等、今我が国が抱えている大きな社会問題にも目が向くようになったからです。しかし、彼がナナちゃんから学んだ一番大きな事は、生きるという事の崇高さと人への優しさではなかったかと思えます。

上杉君が、何度も謝るナナちゃんの声聞きながら「ナナちゃんは、ちっとも悪くないのに」と感じたのは、ひた向きに、一生懸命に生きる姿を見せるナナちゃんのかいって良いでしょう。そして、自分の運動靴を洗おうと思ったのも、大変な思いをしながらもナナちゃんへ優しく接している母親の姿に気付いたからだと思えます。

このように、一つの体験から沢山の気付きへとつなげていく力は、学校教育の場においても育んで行かなければならない大切な力だと、上杉君の作文を読みながら改めて感じさせられます。(塾頭：吉田 洋一)